

# リーダーな女たち

<http://www.mainichi.co.jp/>

## NPO法人「海から海へ」副理事長 阿部愛子さん



30年前、授かった長女の瑞木(みずき)さんは脳に障害があった。会話がうまくできず、人とコミュニケーションをとることが難しかった。苦勞の子育て体験から阿部愛子さん(53)は「娘のためにも社会のためにも、自分ができることを」と思い続け、昨年10月、夫とともにNPO法人「海から海へ」を設立した。

娘には、幼いころから絵の才能があり、現在まで油絵を中心に61点を描いている。素朴で力強い画風は専門家の評価も高く、東京美術文化協会賞(87年)、障害者総合美術展で最優秀賞(96年)など、多くの賞を受賞してきた。

NPO活動は、瑞木さんの作品を展示

1950年生まれ。新潟県出身。73年に、瑞木さんを出産。98年に、24年間の子育てと娘の絵を紹介した「絵はコミュニケーション」を出版。  
02年に日本大学大学院文学研究科

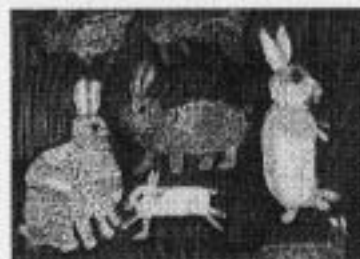
理学専攻前期博士課程に入学。「障害をもつ子どもの親の心理」を研究。03年10月、NPO法人「海から海へ」を設立し、副理事長。ホームページは<http://www.umi.or.jp>

方を選択し、どんな支援を受けられるか選ぶことは難しい。行政はそこまで面倒を見てくれないからだ。

一方、障害児の親は「子どもの障害は親のせい」と、自分を責める傾向が強い。阿部さん自身、娘のことで長年負い目を感じてきた。そんな悩みを聞いて、少しでも心の負担が軽くなれば……。同じ境遇の親に「一人で悩まず相談に来てほしい。親がその人らしく生きる手伝いをしたい」と、夢は膨らむ。

ただ、カウンセリングには専門的な知識と技術が必要である。そう考えて現在、「知的障害の子どもを持つ親の心理変容」をテーマに、日本大学大学院で心理学を専攻中だ。いずれは臨床心理士の資格取得を目指している。

瑞木さんはいま、調布市のグループホ



瑞木さんの作品「うさぎと鹿」

障害者は生活を続けていくことができる。阿部さんは「完全ではないが、理想的な形の一つ」といい、NPO活動でもこの制度を広めていこうと考えている。

正直に言えば、「自分の死後、娘はどうなるのか」という個人的な心配も頭から離れない。自分が死んだ後も、娘が困らずに生きていける社会を作りたい。年

# 障害者の娘と社会のために

する美術館建設が中心だ。「街の中に身近な美術館を作り、障害者も私たちと同じように生活していることを知ってもらいたい」と訴える。現在は場所を探したり、資金集めに駆け回っている。

また、自分の故郷である新潟県寺泊町にグループホーム「きく」の建設を進めており、今年中の開設を目指す。

さらに、「こことふくしの相談室」を東京都調布市に6月ごろ設立する予定だ。阿部さんを中心にカウンセリング経験のある人たちが、悩みやストレスの相談にあたるという。

03年4月、政府は障害者が自分で支援内容を選べる「支援費制度」を始めた。しかし、現実に障害者自身が自分の生き

ーム「フレンズ」にいる。自宅から500メートルほどの所にあり、平日は福祉作業所の仕事が終わると、ネコの静香ちゃんにえさをあげに家に来て、またフレンズに帰っていく。週末は自宅で過ごし、絵を描く生活を送っている。

娘の将来を心配していた時、数人の障害者が、世話人と一緒に生まれ育った地域で生活する「グループホーム」という制度を知り、99年に同じ障害児を持つ親と一緒に「フレンズ」を作った。

障害者は親の死後、本人の意思と関係なく地方の施設に入れられることが多いという。だが、突然知らない地域に連れて行かれても、適応するのは難しい。しかし、グループホームなら親の死後も、

齢を重ねることに、娘の成長を見る度に、そんな気持ちが強くなる。

阿部さんは、瑞木さんの絵を画像データとしてパソコンに保存している。「これはみーちゃん(瑞木さん)が、好きなネコよ」と一枚ずつ説明する時、母親の顔に戻る。【藤原美登里、写真も】

この記事は毎日新聞の女性サイト「カモミール」(<http://www.mainichi.co.jp/women/>)でもお読みいただけます。